OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	医療・看護教育領域への演劇ワークショップの活用
Author(s)	蓮, 行
Citation	Communication-Design. 2015, 13, p. 57-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/53837
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

医療・看護教育領域への演劇ワークショップの活用

蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

The Usage of Theatre Workshop in the Field of Medical and Nursing Education

Ren Gyou（Center for the Study of Communication-Design: CSCD Osaka University）

看護師、栄養士、保健師を目指す学生向けの演劇作りの演習を行った岡山県立大学における試み、糖尿病診療・療養指導を劇として演じる糖尿病劇場、看護師と臨床検査技師を対象に演習形式で発表する天理医療大学での試み。継続的な活動を通して顕在化したアートと医療の関係に対する考察を述べる。

This paper shows the author's insight toward the relationship between arts and medical and nursing field through the continuous activities, for example, drama education for students in nursing course, Okayama Prefectural University and so on.

キーワード
演劇、ワークショップ、医療・看護教育

1. はじめに

オスラー（William Osler 1849年7月12日－1919年12月29日）という、臨床医学と医学教育に大きな功績を残したドクターの残した「医療は科学に基づくアートである（The practice of medicine is an art, based on science.）」という言葉がある。artはしばしば「技術」や「技」と訳されるようだが、職業演劇人であり、コミュニケーションデザイン・センターのアート部門に属する身としては、ここはカタカナの「アート」という訳を採用したい。

さて、筆者は職業演劇人として小劇場演劇作品の上演をメインの活動に据えつつも、この10年余りは主として小学校で「演劇で学ぼう」と題した演劇ワークショップ（以下：演劇WS）を展開してきた。そして、そこから派生的に、広い年齢層（未就学児～後期高齢者）と、多様な専門性を持った対象（医療福祉、法曹、教員、建築等）へと、フィールドが広がっていった。本稿では、その中でも「医療・看護教育」に関する事例を紹介する。前述のオスラー博士の言葉にあるように、演劇というアートと医療は親和性が高く、筆者も2008年から数年にわたって継続的に取り組んでおり、本稿でその主だったものを導入時の時系列順に紹介した上で、考察を加える。そして、それらの事例に興味を持った方たちと、新たに

有効なネットワークを築くきっかけとしたい。

2. 岡山県立大学での取り組み

2008年4月開講の岡山県立大学保健福祉学部「チームガバナビリティ演劇演習」では、看護師、栄養士、保健師を目指す学生向けの演劇作りの演習を行った。これは文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」によって開講された科目であり、3年間の「実践的チームガバナビリティ育成教育プログラム」の出口科目に設定されていた。通年の科目として、夏休みの時期に児童館での子供向けの食育劇「対決! 運動会! ちゃんと食べる子食べない子」、11月には高齢者向けのメタボリックシンドローム（以下メタボ）予防啓発劇「メタボ退治じゃ！ミート黄門」上演を2大イベントとするカリキュラムがデザインされていた。

講義の内容としては、食育やメタボ対策と言った、保健福祉学部の学生諸君の専門についてはむしろ教員側が学生諸君から「教わる」形で、そしてそれを演劇の脚本にし、演技や演出で肉付けして立体化していくことを教員が行う、という進め方であった。「実践的チームガバナビリティ育成教育プログラム」のウェブサイトに、チームガバナビリティ演劇演習を含めた全体の報告がアップロードされている[1)]。

また、岡山県立大学の村社卓教授の『介護支援専門員のチームマネジメント』のpp.110～140に、参与観察者としての詳しい記述がある。

3. 糖尿病劇場

「「糖尿病劇場」とは、糖尿病診療・療養指導のよくある一場面をモチーフにした「劇」を行い、その後会場の参加者とともにディスカッションを行う、聴衆参加型プログラムである。「糖尿病劇場」は2009年に日本糖尿病学会年次学術集会（大阪）で東京・関西・沖縄の糖尿病に係わる医療者によって2日間にわたって実施され、現在まで50回以上全国で行われている。「糖尿病劇場」は「症例検討」のように、患者だけを対象とするのではなく、「演劇」を通じて、患者と医療者の関係性に注目し検討することを目的としている」（岡田浩[2015]）。

筆者の取り組みとしては、2010年11月に実施した、第8回西東京糖尿病心理と医療研究会「あなたも糖尿病劇場を作ろう!!」にて、主任講師を担当した。糖尿病医療に関わる医師およびコメディカルが、若手からベテランまで混ざって受講していたが、その職種や経験年数などを患者役も含め、抽選でシャッフルして役柄を設定した（例：ベテランの医師が研

修医役、看護師が患者役、など)。その上で、医療にまつわる短編コメディを2チームに分かれて上演し、お互いが見せ合うという形で実施した。

当日は、患者とのコミュニケーションにおける暗黙情報[2]の重要性への関心を持った、という反応が強かった。

4. 天理医療大学での取り組み

総合基礎科目（必修）の「芸術とコミュニケーション」科目群の中の「生命と芸術実践演習（演劇表現A)」として、半期2単位で開講されている。大きな特徴として挙げられるのは、看護師と臨床検査技師（人数比は7：3）を養成する単科大学で、「芸術とコミュニケーション」を必修科目として1年次から4年次まで履修させている、ということである。

筆者が担当する講義内容は、コミュニケーションゲームによってチームビルディングを進めつつ、期の最終段階に設けられた発表（クラス内発表の場合と、近隣の子供達を招いての発表会の場合がある）にて、演劇作品を上演する、というものである。上演に関しては、医療とは全く関係ないテーマを自分たちで設定するようにしており、裁判劇を作ったチームや、昔話をアレンジしたチームなど、多様な作品が発表された。

1年生から4年生までが混ざって受講する形態であり、上級生はすでに「芸術とコミュニケーション」科目を履修済みであるため、「上級生が下級生の面倒を見ながら、自主的に創作を進行させていく」という現象が起こるようにデザインされている。

なお、岡崎医師も筆者と共同開講という形で期の中ほどに出講しており、「糖尿病劇場」の紹介と体験の機会を設定している。

5. 平成 26 年度国公私立大学附属病院医療安全セミナー

「国公私立大学附属病院医療安全セミナーは、大学病院で医療安全を推進するにあたって必要な専門的かつ実践的知識の習得や、最新のテーマを学習することを目的としています。

本セミナーは平成13年度から文部科学省主催・実施として開始され、平成16年度からは文部科学省主催・大阪大学実施となり、平成21年度からは大阪大学が主催・実施大学となりました。」（大阪大学医学部付属病院HP[3]より引用）

学習目標として、

1. ヒューマンファクターズを踏まえた医療安全対策を実施できるようになる。
2. 専門職への効果的な教育アプローチについて理解を深める。

3. 医療チームのパフォーマンスを向上するための教育を行えるようになる。
4. 組織の安全文化を醸成するための具体的な方法を理解する。
5. 医療安全及び質に関する国際的知見や最新の動向を理解する。

の5項目が掲げられている。

筆者は、専門職への効果的な教育アプローチ（座長：自治医科大学附属病院医療安全対策部・長谷川剛教授）と題されたセッションで、講演「大人のまなびを学ぶ」（講師：青山学院大学社会情報学部・苅宿俊文教授）に続いて、講演「演劇で医療安全コミュニケーションデザイン」を担当した。

高度な専門家354名に対し、60分で演劇ワークショップを実施する、という厳しい条件であったが、固定座席の前と後ろの人でそれぞれが女子高生と中年男性を演じる「JKとOYJ」というタイトルのコミュニケーションゲームを開発し実践した。環境としても厳しい上に2日間に渡るセミナーの中の1コマであったので、何か大きな学びを得てもらう事よりも、「医療安全の向上のツールとして、演劇やワークショップの導入を検討してみたい」と思ってもらえるような講座になるよう、デザインした。

6. 考察

筆者の考える「演劇」の要素は「人物（キャラクター）」が、ある「場面（時と場所と場合）」で「出会う」ことで、「事件」が起こり進行していく、ということである。医療現場は、すでに病気や失調といった「事件」を抱えた患者という「人物」が、高度な専門性を持っていると同時に間違いなく生身の人間である「医療者」と、「診察室」や「病室」で出会うという、（不謹慎な言い方ではあるが）劇的な構造を持っている。そこでは、些細な行き違いから医療過誤に至る大小様々な事件が起こりうる。

演劇ワークショップの手法は、その「人物」を入れ替えたり「場面」を様々に設定したりすることで、日常業務では固定しがちな「視点」を動かし、何かを教わるのではなく参加者自らがなんらかの「智」を自力で見つけ出すことを促すという機能を持つ。しかも、それは「本当の患者」が居る訳ではないので、本当の「事件」にはならないという安心・安全が担保されている。

糖尿病劇場に代表される、医療を直接のテーマとした演劇ワークショップは、「演劇【で】医療」を学ぶと言えるし、天理医療大での実践のような、医療から離れたテーマで行う演劇ワークショップは、「演劇を作ること【から】、チームビルティングやコミュニケーションを学ぶ」と言うことができる。

「演劇【で】アプローチ」及び「演劇【から】アプローチ」については、「システム／制御

／情報」の第58巻、第12号の解説記事「「演出家」の視点からみたコミュニケーション支援」に詳述している。

7. まとめ

エビデンスベースト－メディシン（evidence-based medicine／科学的根拠に基づく医療）と、それを補完するナラティブベースト－メディシン（narrative-based medicine／物語に基づく医療）という、近年の医療で重要視される概念の中で、演劇WSの手法はナラティブベースト－メディシンのための重要なツールと位置づけられる。とはいえ、エビデンスベースト－メディシンを前提とする以上は当然、演劇WSの活用の仕方やその効果についてのエビデンスが求められることになる。しかし医療・芸術・WSはどれも複雑系の最たるものであり、それらの組み合わせの中からエビデンスを示すのは極めて難しい。演劇は極めて応用範囲が広く、様々な知見が結集する総合芸術であるので、その活動の中で得られた「一見、医療とはかけ離れたもの」を含めて、医療教育に引きつけて、役立てていきたいと考えている。

注

1）岡山県立大学保健福祉学部HP、実践的チームガバナビリティー育成教育（http://www.team-gover.oka-pu.ac.jp/report/index.html）最終閲覧日2015年3月31日.

2）暗黙情報とは、マイケル・ポランニーが提示した「暗黙知」の考え方から筆者が派生させた言葉であり、言葉などに明示的に表れない人間のノンバーバルな表現に含まれる情報を指す.

3）大阪大学医学部付属病院中央クオリティマネジメント部HP、平成26年度国公私立大学附属病院医療安全セミナー（http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp/home/hp-cqm/ingai/seminar/）最終閲覧日2015年3月31日.

参考文献

岡田浩（2015）「「糖尿病劇場」～糖尿病エンパワーメントに基づく薬剤師の新たな役割」『薬学雑誌』135（3）：349-350.

村社卓（2012）『介護支援専門員のチームマネジメント―リーダーシップの移譲とチームワークの拡大―』川島書店：110-140.

蓮行（2014）「「演出家」の視点からみたコミュニケーション支援」『システム／制御／情報』58（12）：493-499.